

保育カリキュラム論

— 計画と評価 —

編著

豊田和子・新井美保子

共著

(執筆順)

加藤由美・柴田智世・上村 晶

小島千恵子・大岩みちの・安部 孝・野田美樹



建帛社

KENPAKUSHA

はじめに

2017年3月に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3法令が同時に改訂（改定）・告示された。そこでは保育内容の共通化が図られ、保育所も幼児教育を行う施設として位置付けられた。このことは大きな変革であろう。就学前の幼児がいずれの施設に在園したとしても、保育の質が保障され小学校との連続性が図られた点は、所管行政の枠を超えての取組みとして評価されるところである。

あわせて今回の改訂（改定）では、幼児教育から高等学校教育まで一貫した教育方針が打ち出された。例えばそれは、「3つの資質・能力の育成」や「主体的・対話的で深い学び」、「カリキュラム・マネジメント」などの導入である。いずれも21世紀型の新しい学力観に基づいたものである。このような時代の変化の中、幼稚園・保育所・認定こども園のすべてが、子どもの最初の学校教育を担っている役割であることを改めて意識しなければならない。

これらの改訂（改定）の理念を保育において実践していくためには、これまで以上にカリキュラムの果たす役割が重要となる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目が明示されたことも、保育カリキュラムの編成に大きな影響を与えることになるだろう。また、保育所を中心に低年齢児の入所が増加している状況に対応して、0・1・2歳児保育が抜本的に見直され、0歳児における「3つの視点」と1・2歳児における5領域が導入されたことにも同じことがいえる。これらの改訂（改定）が保育実践の充実を導き、乳幼児のよりよい発達につながるように、0歳児から就学前・就学後までも見通したカリキュラムの編成を試みていく必要がある。

本書においても3法令の内容に即し、実践に役立つ充実した内容となるように具体的事例を多く取り入れた。近年増加している幼保連携型認定こども園についても章を立て、教育・保育への総合的理解が深まるように工夫もしている。保育者をめざして学修中の方だけではなく、すでに保育に日々取り組んでおられる方々にも、保育実践の質の向上のために本書をご活用いただければ幸甚の限りである。

なお、本書では「保育」という言葉について、保育所に限らず幼稚園や認定こども園のいずれの施設においても養護と教育を一体的に行う必要があるという理解に基づき、統一して「保育」という言葉を使用している。

最後に、本書の上梓に際し、各種資料をご提供いただいた関係機関の方々、ならびに建帛社編集部の皆様にご心より感謝申し上げます。

2018年11月

編 者 一 同

本書の使い方

1. 前半の理論編（第1・2・3・4・5章）では、保育原理や教育原理などの科目での学習と関連づけながら、カリキュラムとは何だろうという問題意識をもって基本を正しく学ぶ。
2. 後半の実践編（第6・7・8・9章）では、解説と提示されているさまざまな事例から、子どもの姿のとらえ方や保育の見通しなどを、もし自分がその保育者だったらどう考えるかという応用的な勉強を行う。
3. 第3章以下では、末尾に「考えてみよう、ディスカッションしてみよう」を設けているので、グループ討議やプレゼンテーションなどを行い、自主的に学び合う。

* 保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領および同解説の引用については、原文の用字表記のまま掲載しています。本書の本文については、必ずしもそれら要領・指針の用字表記とは一致していませんので、ご承知ください。

目 次

第1章 カリキュラムの意義と保育の基本…………… 1

1. カリキュラムの意味と歴史…………… 1
 - 1 カリキュラム (Curriculum) の意味 (語源) 1
 - 2 カリキュラムのタイプ 2
 - 3 わが国の保育の歴史におけるカリキュラム 2
2. 保育の基本とカリキュラム…………… 5
 - 1 保育の制度と目的 5
 - 2 保育の基本 5
 - 3 正しい子ども観に立つ 6
 - 4 計画的な環境の構成 6
3. これからの保育カリキュラムに求められるもの…………… 6
 - 1 「社会に開かれた園づくり」という発想から 7
 - 2 「育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」 8

第2章 保育実践とカリキュラムの関係…………… 11

1. 保育実践におけるカリキュラムの意義…………… 11
 - 1 カリキュラムは、保育の見通しを示し、楽しみをつくり出す 11
 - 2 カリキュラムは、保育への共通理解を深める 12
 - 3 カリキュラムは、保育者や子どもたちを守る 12
2. 保育におけるカリキュラムの位置付け…………… 13
 - 1 カリキュラムの種類 13
 - 2 カリキュラム編成の流れ 13
 - 3 特色あるカリキュラム編成の実践例 15
3. 保育の質とカリキュラム・マネジメント…………… 19
 - 1 保育における活動内容とカリキュラム 19
 - 2 子どもの主体性とカリキュラム 19
 - 3 保育の質の向上とカリキュラム・マネジメント 20

第3章 保育所保育指針における「全体的な計画」「指導計画」の基礎理解……………21

1. 全体的な計画の目的－保育における意義－…………… 21
 2. 全体的な計画の内容と作成上のポイント ……………23
 - 1 全体的な計画の内容 23
 - 2 全体的な計画の作成上のポイント 24
 3. 長期の指導計画と作成上のポイント…………… 25
 - 1 長期の指導計画とは 25
 - 2 長期の指導計画の作成上のポイント 25
 - 3 3歳未満児の指導計画 28
 4. 短期の指導計画と作成上のポイント…………… 29
 - 1 短期の指導計画とは 29
 - 2 短期の指導計画の作成上のポイント 29
 5. 指導計画をデザインするためのポイント…………… 31
 - 1 主体的な遊びの展開 31
 - 2 養護と教育の一体的な展開 31
 - 3 保育者の「子ども理解」と「援助」 31
- 考えてみよう，ディスカッションしてみよう…………… 34

第4章 幼稚園教育要領における「教育課程」「指導計画」の基礎理解……………35

1. 教育課程の目的－保育における意義－…………… 35
 2. 教育課程の内容と編成上のポイント…………… 36
 - 1 教育課程の位置付け 36
 - 2 教育課程編成上のポイント 36
 3. 長期の指導計画と作成上のポイント…………… 38
 - 1 1年間の保育実績を翌年度の仮説とする 38
 - 2 各期のつながりを考える 38
 4. 短期の指導計画と作成上のポイント…………… 39
 - 1 ねらいとは 39
 - 2 子どもの要求と，保育者のねらいのズレをどうとらえるか 43
 - 3 遊びの楽しさ，おもしろさを共有し合う 44
- 考えてみよう，ディスカッションしてみよう…………… 45

第5章 幼保連携型認定こども園教育・保育要領における「全体的な計画」「指導計画」の基礎理解……………47

1. 幼保連携型認定こども園の教育および保育の基本…………… 47
 - 1 幼保連携型認定こども園の制度的枠組み 47
 - 2 幼保連携型認定こども園の教育および保育の基本 48
2. 全体的な計画の目的－教育・保育における意義－…………… 49
 - 1 幼保連携型認定こども園における全体的な計画とは 49
 - 2 幼保連携型認定こども園における全体的な計画が果たす役割 49
3. 全体的な計画の内容と作成上のポイント…………… 50
 - 1 全体的な計画の内容 50
 - 2 全体的な計画の作成上のポイント 51
4. 長期の指導計画と作成上のポイント…………… 54
 - 1 長期の指導計画とは 54
 - 2 長期の指導計画の作成上のポイント 54
5. 短期の指導計画と作成上のポイント…………… 57
 - 1 短期の指導計画とは 57
 - 2 短期の指導計画の作成上のポイント 59
- 考えてみよう，ディスカッションしてみよう…………… 60

第6章 乳児保育における「指導計画」のデザインと実践展開〈0・1・2歳児保育を中心に〉……………61

1. 保育所保育指針に示された「乳児保育」「1歳以上3歳未満児の保育」の視点…………… 61
 - 1 乳児保育の「3つの視点」 61
 - 2 1歳以上3歳未満児の保育は，保育内容「5領域」の観点で 62
2. 子ども一人一人を理解して自立に向けた生活習慣づくりから始めよう…………… 63
 - 1 食事 63
 - 2 排泄 65
 - 3 睡眠 65
3. 運動機能の発達…………… 66
4. 心と関わりの育ち…………… 66
 - 1 愛着関係 66
 - 2 泣きと笑い 66
 - 3 人見知り 68

4 言葉の発達－三項関係	68
5 自我の芽生え	69
5. 子ども一人一人の生活をデザイン（立案）する	69
1 一日の生活の流れを知る	70
2 生活デザインを計画に生かすためのポイント	71
3 計画の実際	73
4 保育を振り返る	74
6. 家庭との連携	75
1 保護者との信頼関係	75
2 保護者と保育者をつなぐ「連絡帳」	76
考えてみよう，ディスカッションしてみよう	78

第7章 幼児保育における「指導計画」のデザインと実践展開〈3・4・5歳児保育を中心に〉 79

1. 3・4・5歳児（3～6歳）の発達の特徴を理解することから	79
2. どのような活動で一日が構成されているのだろうか	81
1 一日の流れを知る	81
2 活動の意義を考える	82
3. 保育者は、指導計画をどのようにデザインするのだろうか	88
1 デザインのポイント	88
2 月案，週案，日案の立て方と実際	89
4. 保育実践につなげるための保育者の視点	96
1 保育を展開するとき	96
2 保育の後の振り返り	96
5. 家庭・地域との連携	97
考えてみよう，ディスカッションしてみよう	98

第8章 保幼小接続のカリキュラム 99

1. 保幼小連携の場合の「指導計画」の工夫（特色ある事例）	99
1 保幼小連携をめざすカリキュラムづくりの意義	99
2 事例から学ぼう	106
考えてみよう，ディスカッションしてみよう	110

第9章 記録・振り返り・評価から再立案へ 111

1. PDCAサイクルにおける記録	111
1 保育実践を記録することの意味	111
2 カリキュラムをデザインするために	111
2. 指導計画と実践記録	112
1 1年間を通した記録	113
2 クラスの活動の記録	116
3 記録から学ぶ	117
3. 評価を保育実践に生かす	117
1 評価の方法	117
2 カンファレンスの大切さ	117
4. 記録の書き方のポイント	119
5. 小学校との接続を意識した記録	120
1 小学校のスタートカリキュラムの位置付け	120
2 「保育所児童保育要録」「幼稚園幼児指導要録」「幼保連携型認定こども園園児指導要録」	120
考えてみよう，ディスカッションしてみよう	123

■索引	124
------------	-----

第1章

カリキュラムの意義と保育の基本

保育は、たくさんの可能性と将来への希望を秘めた乳幼児と共に生活をつくりだしていく、やりがいのある営みである。乳児期から保育施設を利用する子どもが増え、乳幼児期の教育の重要性が叫ばれている現在、保育者に求められる専門性はますます高まってきている。

本章では、本書全体の導入部分として、まずはカリキュラムとは何かを理解し、新しい保育所保育指針や幼稚園教育要領等の保育の基本にのっとり、これからのカリキュラムはどうあるべきかについて考えてみよう。

1. カリキュラムの意味と歴史

1 カリキュラム (Curriculum) の意味 (語源)

通常、小学校以上の学校には教育課程を意味するカリキュラムというものがあり、学年ごとに学習目標や学習内容などが系統的に計画され、教師はそれに基づいて指導している。幼稚園や保育所等では遊びや生活が中心であり小学校以上のように教科の学習はないが、「保育の全体的な計画」や「教育課程」「指導計画」などのさまざまな計画があり、一般的にそれらは「保育カリキュラム」と呼ばれている。子どもたちの成長・発達に責任をもち、見通しのある保育を行う上で計画は重要な意味をもつ。では、そもそも「カリキュラム」とは、どのような意味だろうか。

「カリキュラム Curriculum」という英語は、ラテン語の「クレレ currere」(走路, 競走, コースという意味)に由来して教育学に応用され、「時間の経過」「履歴」「人生の来歴」などを意味する言葉となっている。なぜ、この言葉が教育や保育の世界に使われるようになったのか、興味深い。歴史的には16世紀のヨーロッパの大学で「学生が学修すべき内容を計画したもの」のことをカリキュラムという言葉で言い表したのが始まりで、その後、広く学校教育で使われ、スタート(入学)からゴール(卒業)までの教育内容を計画したもの、つまり「教育の順序」「教育の計画」を表す意味で用いられ、特にヨーロッパやアメリカで定着し、日本の学校では戦後になってアメリカの影響を受けて教育課程やカリキュラムという用語が広まっていった^{*1}。

*1 吉本均責任編集:『現代授業研究大辞典』, 明治図書, 「カリキュラム」p.394 (1987) 参照。

2 カリキュラムのタイプ

カリキュラムは、先に述べたことから、教育の内容を学年あるいは年齢ごとに順序立てて計画したものである。教育の目標や内容に考え方によって、教科型のカリキュラムと経験型のカリキュラムという、大きく2つのタイプに区分され、通常、次のように対比されている。保育カリキュラムを考える上でも参考になるので、それぞれの特徴を理解しよう。

(1) 教科カリキュラム

「学科カリキュラム」とか「学問中心カリキュラム」とも呼ばれ、学校での教育内容を編成していく際の軸に諸科学・文化・芸術の領域において、それらを教科として順序立てて構成していく考え方である。ここではいろいろな教科を系統的に教えることを通して、人類が蓄積してきた文化や科学の基礎を子どもは習得し知識や技能を身に付けることでその時代を生きていく力を得るとともに、新たな文化を創り出す可能性をもつことに教育の意義を見出す。

幼児教育でも、言葉の練習や知識・技能の系統的な習得を重視する場合には、このような「教科カリキュラム」に近い考え方がみられる。このカリキュラムでは、子どもは保育者から教えられて知識や技能を学んでいくという原則になり、「…を身に付けさせる」「…できるようになる」というように教えるべき目標から保育が展開される。そして、子どもが何に興味をもつかよりも、知識や技能として何を教えるか・何を身に付けさせるべきかということが重視されるので、教師中心の保育に傾きやすく、通常、幼児教育や保育には合わないだろう。

(2) 経験カリキュラム

教科カリキュラムと対立するのが「経験カリキュラム」である。20世紀初頭の新教育運動^{*2}の中で教師中心・学問中心の教育が批判され、児童中心主義の教育が登場したことと関連する。

ここでは、子どもの興味や関心、意欲が重んじられるので、教育内容の中心に子どもの日常生活の経験がおかれ、子どもが生活場面での問題を解決することを通して有意義な経験を積んでいくところに教育の意義を見出す。このカリキュラムでは、教科内容の系統的な配列という発想は取り払われ、日常生活の中で子どもが経験するさまざまな活動が主題として取り上げられるので、「活動カリキュラム」ともいわれる。

経験カリキュラムは、子どもの遊びや生活を重視する保育の世界では受け入れられやすい。だが単に子どもに経験させればよいというのではなく、子どもの興味や関心から出てくる行為の意味を保育者が読み取り、経験を広げていくための援助や環境を工夫していく場合に、このカリキュラムは有効に働く。今日の保育計画の記述に「子どもが…に関心をもち、…を楽しむ」とあるのは、このような経験カリキュラム・活動カリキュラムの考え方にねざしている。

3 わが国の保育の歴史におけるカリキュラム

日本の幼稚園や保育所の歴史の中では、どのようなカリキュラムの考え方があったのだろうか

^{*2} 新教育運動のデューイ (J.Dewey 1859-1952) は、アメリカの実験学校で子どもの生活を中心とした教育を実践して20世紀の「児童中心」の新教育を切り拓いた。Learning by doing (なすことによって学ぶ) は有名。

か。明治期の初めに日本で最初の幼稚園が創設されてから、すでに140年以上が経過したが、この間、さまざまな保育カリキュラムが生まれ、今日に至っている。保育の歴史を踏まえてカリキュラムを研究した穴戸は次の3つに分類^{*3}しているので、参考にしながら説明をする。

（1）課業活動（設定保育）を軸とするカリキュラム

「課業」とは「学校などで課する学科や作業」を意味し、保育ではクラスの全員が同じ時間に同じ作業をする活動のことをいう。1876年（明治9年）に東京女子師範学校附属幼稚園が創設され、フレーベル式の保育が導入されたときのカリキュラムにみられるものであり、保育内容は「物品科、美麗科、知識科」という3科目と恩物の25子目からなっていた。計画は、図1-1のように恩物による活動が週単位で作成され、一日の保育は時間割のように配列され、園児たちは授業のように一斉に同じ活動をした。これは、先述の「教科カリキュラム」に基づくものであった。

	30分	30分	45分	45分	1時半
月	室内会集	体操	球ノ遊（第1箱）	図画（3倍線ノ直角等）	遊戯
火	同	同	小話	貝ノ遊ヒ	同
水	同	同	三形物（球・円柱・六角形）	畳紙（第1号ヨリ第4号ニ至ル 其ノ他簡易ノ形）	同
木	同	唱歌	計数（1ヨリ10ニ至ル）及ヒ体操	鎖ノ連接	同
金	同	体操	形体積ミ方（第3箱ニ至ル）	針画	同
土	同	同	画解	木箸置キ方（6本ニ至ル）	同

図1-1 東京女子師範学校附属幼稚園の保育時間表の一部（第三ノ組 小児満3年以上満4年以下）

（文部省：『幼稚園教育百年史』、ひかりのくに、p.59、1979を参照、横書きにして筆者作成）

（2）遊びとその発展を軸とするカリキュラム

明治の終わりになると恩物中心の保育カリキュラムが批判され、1899年（明治32年）に「幼稚園保育及設備規程」が制定され、保育内容は「遊嬉、唱歌、談話、手技」の4項目となり、遊びを意味する「遊嬉」が最初に出てくる。さらに大正期にかけて、欧米の新教育運動の児童中心主義の考え方の影響を受けて、自由保育、生活保育の考え方が広まった。新たに登場したのが幼児の遊びを重んじる「子ども中心のカリキュラム」である。1926年（大正15年）には、「幼稚園令」が出され、保育内容は「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」の5項目となり、このような流れの中で登場したのが、幼児の遊びとその発展を軸とするカリキュラムである。

幼児の遊びの種類にはどのようなものがあるか、それはどのように発展していくのかという発想から考えられたカリキュラムである。戦後はアメリカの指導の下に、しばらく、子どもの経験としての遊びを重視した保育カリキュラムの時代が続いた。その代表的なものには、倉橋惣三の「系統的保育案の実際」（1953）がある。図1-2は、そのうちの一部である。

（3）集団生活を軸とするカリキュラム

戦後の経済が発展し1970年前後になると、乳児期からの集団保育が急速に普及してきたこと、また、早期教育ブームの中で幼稚園教育が小学校の教科の学習のようになってきたことなどの

*3 穴戸健夫：『日本における保育カリキュラム 歴史と課題』、新読書社（2017）

生 活		保 育 設 定 案							
自由遊戯	生 活 活 動	誘 導 保 育 案				課 程 保 育 案			
		主題	計画	期待効果	継続作業時間	唱歌・遊戯	談話	観察	手技
砂場で地下鉄遊び	大きい組なつての諸注意	おもちゃ作り	花籠、風車、こまを作りて新入園児に贈る	年少者に対する心得 新来者を迎ふる心 手技	1週間	演戯 花咲爺 (同様唱歌名曲全集) 唱遊 さくら (同様唱歌名曲全集)	アリババ—アラビアンナイト— 釈迦	とかげ たね蒔き (コスモス、松葉牡丹等)	自由画 製作 花籠、こま、風車
戦闘ごっこ	年少組に対する心得								
人形中心のままごと	先生や友達への挨拶について 廊下を走らぬこと いたづら書きをせぬこと等につき再び約束								

図1-2 系統的保育案（1953）の概要（一部） 4月第1週（4月8日ヨリ）

（文部省：『幼稚園教育百年史』，ひかりのくに，p.247，1979を参照，横書きにして筆者作成）

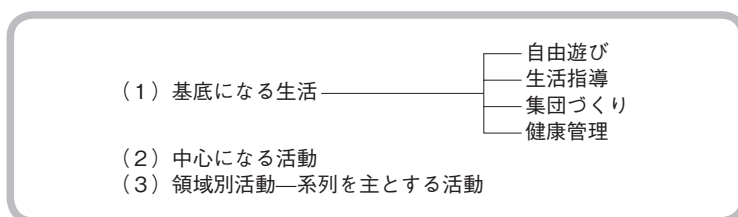


図1-3 教育計画の構造（久保田浩，1970） 3つの層

（穴戸健夫：『日本における保育カリキュラム 歴史と課題』，新読書社，p.157，2017）

社会の変化から，保育所や幼稚園での保育のあり方が見直された。特に，乳幼児の発達特性や活動特性を考えてどのような保育内容を構成するかという観点から，「集団生活の発展」を土台にした保育カリキュラムが考えられた。

その代表的なものには，久保田浩『幼児教育の計画—構造とその展開』（誠文堂新光社，1970）などがある。久保田の案では，園での集団生活の発展と個々の子どもの発達を統一的にとらえて，生活を基盤として，遊びを主とする中心になる活動，そして領域別活動を盛り込んだ点に大きな特徴と成果がある。図1-3は，その構想の枠組みである。

以上のように，わが国の保育カリキュラムには，大きく3つの歴史的潮流がある。しかし，それらは単純にパターン化できるものではなく，その時代の子どもの生活実態や社会からの保育・幼児教育に対する要請や期待を受けて，「教科カリキュラム」と「経験カリキュラム」の間を揺れ動いてきたのが実際である（図1-1，図1-2，図1-3）。